



インド洋大津波の体験談

前号に引き続き、2004年12月26日に発生し世界各国広範囲に被害をもたらしたインドネシア スマトラ沖地震・津波について、震源地に近いインドネシア アチェ州 バンダアチェ付近住民の体験談を掲載しました。

A氏（ランブーク村・男性）

職業はイスラム教寄宿学校（プサントレン）の教師で、当時24歳。地震が起きたのは日曜日の朝だったが、寄宿学校にいた。

揺れ始めてから30秒くらいで揺れが大きくなり5分以上継続したように感じた。幸い寄宿舎や教室の建物には大きな被害はなく、怪我をした生徒もいなかった。余震も続いたので、生徒・教師全員が校庭に避難した。

そのまましばらく校庭にいたが、海の方から爆破音（近くにあるセメント鉱山の発破音に似ていた。）のような音が聞こえてきた。しかし校庭から海の方には校舎があり、さらにその背後には大きな木もあったので海は見えなかった。何の音かは理解できなかった。その直後、非常に早い流れで高さ1～2メートルの第1波が学校の校舎などありとあらゆるものを破壊し、それらを水の中のみ込みながら迫ってきた。その背後には高さ10メートルくらいの「黒い水の壁」が続いていた。

逃げる間もなく、津波に飲み込まれ、水の中を上へ下へと激しく流された。地震で揺れ始めてから津波が来るまでは20分くらいだったと思う。

津波には、海水だけでなく壊れた校舎の残骸などがたくさん混ざっていたので、それらにぶつかって手や足など全身に大きな怪我を負った。2キロメートルくらい流されてラムルム村まで来たところで、立木につかまることができた。10分弱つかまっていたら、少し水位が下がり流れの勢いも弱まったので、水の中から出てちょっとした高まりへ歩いて逃げた。大きな木の下にテーブルがあって日陰になっていたため、そこで1時間半くらい休んだ。少し体力が回復したので、また15分くらい歩いて道に出たところ、オートバイの人が通りかかって助けられた。オートバイに乗せてもらい非常救護テントに運ばれた。

勤めていた寄宿学校には全部で300名くらいの間がいたが、生き残ったのは教師2名、生徒13名の15名だけだった。ランブーク村は中心にあったモスクだけを残して全ての家が津波で流された。残ったモスクも屋根の上の飾りが曲がっており、この高さ以上の津波が襲ったのだろう。

村には津波前には7,000人の人が暮らしていたが、津波後は700人になってしまった。このうち400人は津波のときに村の外にいて助かった人で、村にいて生き残れた人は300人しかいない。無傷で生き残れた人はせいぜい100人くらいだろう。

私の家でも多くの人が死んだ。津波前は両親と姉1人、兄1人、妹1人、弟1人、自分の7人家族だったが、生き残ったのは私と兄1人の2人だけだ。家族の遺体は見つかっていない。

地震は知っていたが、大きな地震の後に津波が来ることは知らなかったし、そもそも津波という言葉を知らなかった。

B氏（ロックガー村・男性）

当時24歳で、仕事は溶接工をしていた。地震が起きたときはロックガー村のモエニケン地区の作業場でまだ寝ていた。揺れで目がさめ、飛び起きて外に出た。地震の揺れは5分くらい続いた。

揺れがおさまってから、部屋に戻って服を着て近くのコーヒーショップへ向かった。コーヒーを注文し飲みながら他の客や店の人と地震の話をしていった。

コーヒーを半分くらい飲んだところで、「水がひいている。」と海岸にいた人が店に来て話していった。自分の目で確認したくなり、近くの川にかかっている橋まで行って見たところ、川も干上がっていた。それ以外にも、「海岸が200メートルくらい引いている。」といった話や、「係留されていたセメント船が転覆している。」といった話も聞いた。

大きな揺れや海が干上がるといった異常なことは生まれて初めてだったので、家のことが心配になり、バイクに乗って同村ランクレット地区にある自宅へ向かった。自宅への道のりは700~800メートルである。地区のモスクの前にバイクをとめて歩き始めて20メートルくらい行ったところで、「森林のようなもの」がココナッツツリーよりも高いところにあらわれたように見えた。ドンドンという音（銃撃音のようなもの）が3回くらいしたが、国軍がGAMだと思ってたいして気にはしなかった。しばらくすると、近くにいた子どもが「水がきた」と言ったので振り返ったら、電柱が倒れるのが見えた。すぐ近くにお母さんと小さな子ども二人という親子連れがいたので、そのうちの子ども一人を抱きかかえ、お母さんには「逃げろ！」とあって10メートルほど走った。うしろを見たら背後20メートルくらいのところまで水が迫っており、3歩走ったところで津波に飲み込まれた。水の中で3回くらい回転し、意識を失った。

数百メートル流され、ランパヤ地区の1軒の民家の中へと運ばれた。抱えている子どもに「起きて」と言われて気を取り戻したら、机の下にいた。そのときには、もう自分のまわりには水はなかった。自分は手足に少し怪我をしていたが、子どもは無傷だった。自分たちのまわりには、他に人影は見えなかったが、5分くらいすると何人かの人がやってきた。

ロックガー村には4つの地区がある。住んでいたランクレット地区は1,700人いた人口が津波後は650人に減少した。職場があったモエニケン地区は2,000人いた人口が津波で400人に減少している。しかし流れ着いたランパヤ地区ではほとんど死者は出なかった。もうひとつ、ウェウラヤ地区というのがあって、相当の被害が出たと聞いているが、詳しい数字などは知らない。

津波被害を受けた晩はケウデビン村（ロックガー村から内陸に3キロメートルほど入ったところにある。）にあった親戚の家に泊めてもらった。その翌日は同村のモスク



津波によって流され壊滅したバンダアチェ付近

に移った。「もう一度、津波が来る。」といった人がいたので、少しでも高いところに行こうとしたためである。その晩はモスクの2階で寝た。

3日目からはバンダアチェ郊外の空港近くにできた内陸地の「テント村」に移り、そこで2ヶ月暮らした。その後はロックガー村にバラックが建てられたので、そこに1年くらい住んだ。現在はBRR（インドネシア アチェ・ニマス復旧・復興庁）が作ってくれた家のできたので、そこに住むようになった。新しい家は丘の麓で高いところになっている。

C氏（プロ村・男性）

当時33歳で職業は漁師。地震が起きた日は漁に出ておらず、その時間はまだ自宅で寝ていたので、揺れを感じ、家の外に出た。揺れが強い間は何もできなかったが、自分の家も周囲の家も壊れるようなことはなかった。揺れは5分から10分くらい続いたと思う。

揺れている間も屋外にいたため、周囲の様子はよくわかり、音もとてもよく聞こえた。海の方から何かが発音するような音が3回聞こえた。一度目の音は揺れ始めてから2分後くらいで、その後も2分さきみくらいで続いて聞こえた。

揺れが完全に収まらないうちに、近くの家の漁師仲間20人くらいで海を見に行った。自宅から海岸までは500メートルくらい離れていた。海岸に着くと、既に海水が沖に引きはじめていて驚いた。一番引いたときは、2キロメートルくらい沖まで引いたと思う。引いた後にはたくさんの魚が取り残されていて、一緒に行った人をはじめ、たくさんの人が「ラッキーだ!」と叫びながら、魚を取りに行った。自分はずいぶん魚取りには参加せず、海を見ながら人と話をしていた。

そうこうするうちに、海水が引いて海底が見えている背後5キロメートルくらいにかなり高い波が迫ってきているのが見えた。波の色は黒っぽかった。波は二つあり、一つ目の波は海岸線に斜めに入ってくるような波で、そのうしろから海岸線にまっすぐ向かってくるさらに大きい波が迫っていた。しかし、しばらくすると、前の波はうしろから来た波に飲み込まれてしまった。

この異常な波を見たので、家族と一緒に裏山へ逃げようと思い、500メートルほど離れた自宅へ急いだ。しかし自宅に戻っても誰もいなかったのもう100メートルくらい離れた自分の母の家へ向かった。母の家に行く途中で妻と子どもたちには会えたので、急いで高いところへ逃げるよう促し一緒に逃げた。妻はものを持ち出すために自宅へ寄りたと言ったが、そんな余裕はないと思ったのでやめさせた。150メートルくらい離れた山へ向けて一直線に走り、丘の上の高いところまで逃げる事ができた。津波は山の麓まで到達した。

海岸にいた何人かは逃げずに「波よ! こないでくれ!」と祈っていたのを覚えている。大地震の後、モスクに祈りに行った人もたくさんいた。自分の母もモスクに行ったと後で聞いたが、津波に飲み込まれて行方不明になった。

丘の上では集落を飲み込んだ津波を眺めていた。はじめの波は右手方向（北側）からやってきて、丘の裾野を通り左手方向（南側）へ抜けて行った。この波のスピードはあまり速くなかった。その後、海岸線の正面から速度の速い津波がやってきて、集落を完全に飲み込みながら丘の麓までやってきた。この2波目はビーチ全体を覆うように進んできた。沖では波の高さはそんなに高くない（5メートル）と思ったが、陸に近づくときどき高くなったように見えた。津波は5分間隔くらいに3回きたが、その後、海はとても静かになった。1波目がきたのが8時30分から8時50分くらいの間だったと思う。丘の上には500人くらい逃げていた。

海がとても静かになったので、逃げた人全員で丘の麓までおりて、行方不明者を捜索したり、死体を集めたりした。しかし、また津波が来るかもしれないと思ったので、山の麓からはあまり離れずに逃げられるところまで活動した。

丘の上には3日間いた。ラーメンを積んだ車が運良く近くに漂着していたので、そのラーメンを食べてすごした。3日後に携帯用無線機を持って逃げていた警察や軍隊の人がバンダアチェとの通信を試みたが、何も反応がなかった。しかし、このままここに居てもどうしようもないのは明らかだったので、全員でバンダアチェに向けて歩きだした。バンダアチェの入り口まで行ったところで集団避難所へ誘導され、そこで約1ヶ月を過ごした。村の津波前の人口は850人、津波後は650人くらいだろう。

D氏（カルン村・男性）

当時、42歳。漁業と農業を半々くらいでやっていた。自宅は海沿いのカルン集落から2キロメートルほど内陸に入った高台にあるセンク・ムラットにあった。

2004年3月26日朝に地震が起きたときは、カルン村のコピーショップでコーヒーを飲んでいて、椅子に座っていたが、揺れがだんだん強くなってきて、いろいろなものが倒れそうになってきたので、近くににあった自分のバイクを押さえていた。揺れは10分くらい続いたと思う。揺れが収まって、まず自宅が心配になった。そこで、一緒にいた2人の娘（当時14歳と3歳）をバイクに乗せて自宅へ帰った。自宅には妻と息子が残っていたが、家族も家も特に被害はなく一安心した。

しばらくすると、奇妙な爆発音が海の方から聞こえてきたので、いったい何の音なのかを確認するため、さきほどの海岸沿いのコピーショップへ戻ろうと思ってバイクで走りだした。道のりの半分くらい（1キロメートル）まで戻った見晴らしのよいところまで来ると、集落の中心にあったモスクの屋根だけを残して、カルン集落全てが水没してしまっているのが見えた。そして、海の水がすごい勢いで近づいてくるのが見えた。海の水は湾全体から浸入してきており、別の入り江から侵入してきたものもあり、その両者が集落の中で合流して一つになっているように見えた。津波の色はミルク入りコーヒーのようだった。

水が迫ってきているので、急いでバイクの向きを反転して自宅へ戻った。そして、家族を連れて山へ走って逃げた。山へ上る道はバイクでは走れないので置いて走った。山の上に3時間ほど滞在し、12時頃になって自宅へ戻った。自宅は少し水をかぶった程度で大きな被害はなかった。

（注）「みんなく 実践人類学シリーズ 9 自然災害と復興支援」（発行所：株式会社明石書店）から転載



（平成17年版消防白書より）

インド洋沿岸各国の人的被害状況